

# 初代団十郎の信仰をめぐって

浅野祥子

市川団十郎の代々は成田不動信仰で著名だが、初代団十郎は多くの神仏を信仰し、その信仰の度合いも熱心をきわめたようである。この小稿では初代団十郎の信仰についていささか気づいたことを述べてゆきたい。初代の信仰については、青江舜二郎氏<sup>(1)</sup>加賀佳子氏<sup>(2)</sup>に論考があり、殊に加賀氏の論文は、武井ゼミナールと共作の願文翻刻と共に、たいへん教えられるところが多かった。

## 一 初代団十郎の願文

初代の信仰を知る一等資料はその願文<sup>(3)</sup>で、伊原青々園による大正六年の書写本が、現在早稲田大学演劇博物館に所蔵される。そのもととなった原本は震災によって焼失したとされるが、加賀氏は、初代団十郎が清書した本である可能性を指摘されている。

願文には、「元禄六年願文」と「元禄九年願文」の二種があり、「六年願文」には「元禄三年願文」の内容と「六年願文」とが両方書かれている。つまり、三種の願文の内容を知ることができるのである。

それぞれには、祈請する多くの神仏の名が記されているので、ま

ず初めにそれらを挙げておく。

三年願文は三宝大荒神に対して書かれたが、その中に祈請の対象として記された神仏は次の通りである。

上野両大師、日月、明星、二十八宿、三光諸天、天道大日如来、不動明王并に二童子（大山）、愛染明王

六年願文では、三年願文の如く努力精進した結果、神仏のおかげで諸事順調だったのを、三年の願が終わって気がゆるみ、運が少し傾きかけた感がすると反省する。そして、再び、酒姪を慎しむことを誓い、森田座の屋にのぼり日天子を礼拝し、天道大日如来に対して願文を捧げる。

九年願文では、自身の家族の無事を、「大日日輪、観世音千手せんげん浅間、延命愛宕則荒神大小不動」のおかげと感謝し、屋にのぼり日天子を礼拝する様子が描かれている。

ここに「観世音千手せんげん浅間」とあるのは、文章中に京の清水寺に塩立ち、水ごり等をして参詣したことがみえるので、（清水寺の観世音は千手千眼観音である）「浅間」ではなく「千眼」であ

ろう。

これらの願文の根本となるものは、やはり、三年願文ではないかと思われる。三年願文で祈請する神仏のうち「上野両大師」を、加賀氏は、慈慧大師、天海大僧正の二者を合わせた呼称だとする。そして、慈慧は安産の祈禱、又、冷泉・一条両帝の誕生の祈禱の功があったこと、天海は「慈慧の絵像を本尊にした祈禱によって、家光の世子竹千代（家綱）を出世させたと謳われている」など、両者とも「子授け大師」という信仰があったという指摘をされている。まことに鋭い指摘で、「子授け」に団十郎が関心を寄せていたことを示す証であろう。

そして、もう一つそこに証をつけ加えておきたい。祈請先の一つである大山不動明王についてである。実は願文には次のように記述がある。

一 不動明王并に二童子、右三年か間、月に一ふりつゝ捧ル所の木太刀、歳に一度の以代参、則大山大小不動明王へ是を捧納事

「不動明王」とあるが、木太刀を大山に納めていることにより、これは大山の不動尊を対象としていることは明らかである。この大山不動も、子授けの仏と信じられていたと考えられるのである。

『相模大山縁起及文書』<sup>(3)</sup>より関連する記事を抜き出し、年表風に整理してみる。なお「」内は『徳川実紀』による。

(一六三八)

寛永15・4・7 家光、大山伽藍再興の命を出す

(一六四〇)

寛永17・8・14 釘始め

8・19 春日局登山し、家光に子を授かるように手長御供を為し、金銀鳥目等奉納。

(一六四一)

寛永18・8・3 「家光に長男誕生。後の家綱。」

11・8 本堂より末社に至る迄落成。春日局より御供の料来る。

(一六四二)

11・9 入仏式

寛永19 家光男竹千代誕生。

9・28 知足院栄増竹千代代参として参り、立願成就の御礼をなす。

(一六四三)

寛永20・4・11 建立成就の祝として家光代参春日局来り、手長供金銀等の奉納あり。一山の住僧役人に至る祝儀あり。凡て建立の初よりの費用十八万両。

(一六五三)

承応2・正 相生院栄誉一七日参籠。温座の護摩を修し金銀等奉納あつて、家綱十三歳の厄除祈禱をなす。

この資料は家綱出生が寛永一九年となっており、正確さがやや危ぶまればするが、御供の種類、家光の奉納金の額も示され、全くのつくり事とは思われない<sup>(4)</sup>。

経過を辿ると、春日局による祈請の他、家綱が生まれた翌年に、

僧栄増が竹千代(家綱)代参として、立願成就の御礼参りをしており、家光の大山再興が嗣子を得るためであったことがわかる。

家光の嗣子については祈禱を行った寺院も多いが、大山不動もその一つとして、「子授け」の靈験あらたかな不動として江戸の人口のぼったものと思われる。初代団十郎が「子授け」に関心があつたとすると、その点から信仰をもったことも考えられる。

なお、つけ加えておくが、「子授け」の仏は「子育て」にも御利益があると信じられ、団十郎の場合、既に長男を得ているので、そちらに重点がおかれているのかもしれない。

ところでこの大山不動には、以下のような伝承も伝わっている(5)。

小田原市曾我の城前寺という浄土宗寺院は曾我兄弟の菩提寺であるが、そこに、兄弟が大山不動を納めた、父の敵工藤祐経を討つことを誓った願文があるという(注(5)のうち『曾我兄弟物語』に写真もあり)。母が大山信仰をもっていたことから兄弟も信ずるようになり、大山不動を下曾我背後の山に勧請し、毎日祈りを捧げたという。その山は今も不動山と呼ばれている。又、城前寺には、兄弟の守本尊だったという不動三尊像が祀られている。

伝説の多く付与されている曾我兄弟であるから、真偽の程は定かではないのだが、兄弟の仇討の成功は大山不動の加護によるものだという、民衆の間の信仰があつた可能性はあげられよう。

なぜこのようなことを述べるかというと、元禄元年三月から五月まで、山村座において初代団十郎は「古今兄弟兵曾我」という作品を上演している(これが、確認できる団十郎が曾我物を演じた初めという説もある―注(6)―)。そしてこの年、一〇月一日将来二代目を継ぐべき久蔵が誕生しているのである(6)。当時二九歳であつ

た団十郎の喜びは推測される。

大山不動を信仰していたという伝承をもつ曾我兄弟の芝居を演じた年に長男を授かったことは、信心深い団十郎を大山不動信仰に結び付けたのではないだろうか。

## 二 千葉の信仰

### 1 星の信仰

団十郎の祖先は千葉、幡ヶ谷の出身といわれる。正保年中、江戸に出、和泉町に住んで幡谷重蔵といたつたという(7)。

千葉に中世まで君臨したのは千葉氏であり、この氏族の信仰が近世以降も千葉地方の信仰に大きく影響を与えている。団十郎の信仰の中にも、千葉からもち伝えたものでないかと思われるものが多い。その一つは星の信仰である。千葉は、全国でも星信仰の盛んな所である。佐野賢治氏によると(8)、この地方の星宮神社は、妙見神社と習合していることが多く、基調に千葉氏の北斗七星、北極星に対する信仰がある(9)。

千葉氏は、その祖、平良文が妙見菩薩に救われたという伝承から(10)、代々妙見信仰をもち、「千葉妙見」像は千葉氏の当主のしるしとして、千葉城内の妙見堂に安置された。妙見菩薩は闘いを司り福を与えるとされている。

妙見信仰はしばしば虚空蔵信仰(明星天子)と混交された(11)。つまり、妙見信仰は、天体全体への信仰に及びやすいものだった。いま、初代の三年願文にあげられた祈請先の神仏のうち、上野両大師、不動明王并に二童子(大山)、愛染明王以外は明らかに天体関係のある仏神である。(天道大日如来も、六年願文で屋より日

天を拝しているところから、日天子の本地として大日如来、ということと天体信仰に含めてよいであろう。注(2)参照。

まず明星だが、本地は虚空蔵菩薩とされ、妙見尊との混合もあるものである。

次に二十八宿とは、月の運行経路である白道上の二十八の星宿名で、『千葉妙見大縁起絵巻』(12)にも「此尊本仏者薬師如来日月光菩薩……天二十八宿……皆妙見大菩薩之變化也」とある。

また、三光諸天とは、日天子、月天子、星のことである。月信仰については、千葉家祖、良文の母が忠文懐妊の際、月に祈ったという記録が前出『千葉妙見大縁起絵巻』にある。

良文未母ノ胎中ニ有シ時高望親王ノ夫人毎日日月星ノ三辰ニ向テ祈願申サセ給ヒレハ今我体内ニ一子ヲヤトセリイカニモシテ男子ヲ儲ケ子孫相統ヲ得セシメ玉ヘト丹誠肝ニ銘セシカハ(以下略)

更に、愛染明王であるが、清涼寺の重文『融通念仏縁起』に、日天子、月天子、七星の側に愛染明王が描かれていることから、愛染明王が天体と関連が深いとする意見もある(13)。また、後に再述するが、千葉常胤は千葉寺に愛染明王を祀っており、千葉氏が信仰を捧げていた仏といえるのである。

こう考えてくると、初代の願文中に占める天体信仰の比重は非常に高いことになる。これは、先祖の出身地、千葉に伝わる信仰の影響ではないかと考えられるのである。

市川家の妙見信仰をしのばせる資料がもう一点ある。  
永禄六(一七七七)年刊行の黄表紙『千葉功』(撰者鈴木吉路、

画工恋川春町)は、千葉氏の守本尊、妙見菩薩像の霊験を説いた後で、末尾に以下のような文を記す(14)。

近くは、二代目海老蔵、この妙見大菩薩を信心する事多年にして、ついに役者のおや玉となりたり。其ほか霊げんはあげてかぞへがたし。くわしきこと下総国千葉妙見寺のえん記にしるしぬるあいだ、信心のともがらいただいて御らんあるべし(15)。

二代目海老蔵とは、四代目団十郎の隠居後の名である。『千葉功』終丁には、この文と共に、四代目と五代目が向き合つて妙見菩薩を礼拝している様子が描かれている。

四代目が妙見信仰をもっていたかどうかを示す資料は他に知らない。しかし、初代が明星をはじめ、千葉と縁があると思われる信仰をもち伝えていたこと、また、四代目は二代目の実子ともいわれるにも関わらず、団十郎襲名に多くの困難を伴ったこと等(16)を考えると、父祖の地に残る神で、闘いの神、福を与える神である妙見尊に信仰を寄せたとしても不思議ではない。

次に、前節で大山不動への信仰について述べたが、千葉氏にももともと不動尊信仰があったことについて補足しておきたい。

## 2 不動信仰

「常胤の信仰」 千葉氏の菩提寺は大日寺であるが、氏寺は千葉市にある真言宗の千葉寺である。本尊は十一面観音、薬師如来であるが、千葉氏中興の祖とされる常胤(一一一八—一二〇一)はこの寺に新たに二堂を建立、愛染明王と不動明王を祀った。常胤は源頼朝に従い、多数の戦を経験した武将なので、戦勝を祈ったと考えられ

る。

「万満寺の不動尊」 千葉、馬橋万満寺の「不動明王脇立二王尊略縁起」(17)は、左の説話を記す。

千葉家某の一子大悪疱瘡をなやみ既にあやふく見へける時、一旅僧来て告ていへらく、今此疱瘡くすりをもつて治すへからず。是をすくハンとならば馬橋邑萬満寺に靈験いやちこなる二尊在す。今このたづさへたる木劔一ふり草鞋一足を献じて病苦をなげき祈願すべし。しかしてその木劔草鞋を借受奉り、家の浄所におきめ置祈念おこたる事なき時ハ、日ならず平癒すみやかなるへし。ゆめ／＼うたがふ事なかれとうふかとおもへば、僧のかたちハ見へずなりにけり。

僧の言葉に従ったところ、小児は命を助かり、疱瘡の痕も残らなかつたという。

万満寺は、千葉氏の菩提寺大日寺が千葉に移った時、大日五仏の尊像が霊仏なるにより馬橋に残り、後にそれを祀つて万満寺というようになつたと伝えられる寺であり、千葉氏と縁が深い。千葉氏が不動尊を信仰した証となる話であろう。

ところで、この万満寺不動尊は、引用文にもあつた通り、信者が木劔と草鞋を奉納するので有名であつた。前掲略縁起後半には、「近里遠境となく此寺に来て木劔草鞋を献じ、ひとしく利益を蒙るものあけてかぞへかたし」と、その盛況ぶりが描かれる。

木劔奉納という点、大山不動のことが思い出されるわけだが、松下邦夫氏によると(18)、万満寺のこの習慣が資料によつて証明されるのは文政頃からということ、初代の大山に対する木劔奉納(三

年願文)と直接関わりはなさそうである。

「称名寺の学問」 千葉氏は十三世紀半ば、称名寺の檀越、金沢北条氏と姻戚関係を結ぶ。その為、千葉寺は、「学問・文化の一拠点」(国史大辞典「千葉寺」の項)となり、学僧が集まるようになった。称名寺(金沢文庫)には不動尊の資料も多く、そこから千葉寺に不動信仰についての経典や学理が導入された可能性がある。

称名寺二世劔阿は、弘安七(二二八四)年、二十四歳の時、「下州千葉之庄大日堂知客寮」で『不動法』一卷を写しており、それは金沢文庫に伝存している。寮をもつ程大きい大日堂とは大日寺のことだと思われるので、これも千葉と称名寺の不動信仰のつながりを示す資料といえよう(19)。

「成田不動尊」 成田不動尊にも千葉氏は庇護を加えていた。文治四(一一八八)年には千葉介常胤が諸堂を建立し、建武年間には千葉新介が堂塔を修復した(20)。しかし、その後は戦乱の影響などで、七度回祿に逢う、という状況だったようである。(成田山が江戸の民衆の信仰を集めるのは元禄一六年、深川で初めて本尊の出開帳を行つてからであり、この時は初代団十郎・九蔵が森田座で「成田山分身不動」を上演し、たいへん評判となつた。成田山中興照範上人の時である(21)。

このように、千葉は不動信仰のあつた土地であり、千葉出身の団十郎にも、もともと不動信仰の素地があつた可能性は大きいことを付け加えておきたい。

### 三 「石原」の上人

初代団十郎の願文の、祈請先の神仏について考えてきたが、もう一点、願文本文中に表れている信仰についてふれておく。「六年願文」中に、

念仏けんごに、奥沢のおく、又石原の末にも、誠を行ざる御法もあればある。

という一文がある。

「奥沢」「石原」に、堅固な念仏の信者がいたという意味であるが、この行者のうち、「石原」にいた人物は、顕蒼祐天上人であると考えられる。

上人は貞享三（一六八六）年、増上寺学頭職の地位を捨てて牛島へ隠棲するが、その後転居して石原にも庵を結んでいたことがある（石原は広義では牛島といえるので、まとめて牛島時代と称することが多い）。

『祐天大僧正利益記』巻上「名号靈験の事」中には（22）、

元禄三午年の春。江戸浅草寺の境内より出火して。……本所の口まで焼出せり。師の庵室も師ハ此時本所石原にすみ玉へり瞬息のうちに焦土となりぬ。

とあり（名号が焼け残った奇瑞譚である）、元禄三年時には庵は石原にあったことが理解される。

祐天が將軍綱吉により檀林の一、生実大巖寺住職に大抜擢されて石原を出るのは、元禄一二年であり、団十郎が願文を書いた時期（元禄六年）には、石原の祐天上人で通っていたことが推察できる。

小稿（23）で祐天寺『本堂過去靈名簿』に残る団十郎関係の法名を紹介し、二代目以降の祐天への信仰が考えられることを述べた折、初代の信仰については保留しておいた。この資料により、元禄六年頃には、初代は祐天のことを、石原に隠棲している高德の念仏者と意識し、尊敬しているにしても、一言で済ましている様子から、おそらく自ら庵を訪ねてゆくほどの信者ではなかったと考えられる。

初代の没後、位牌が祐天もしくはその後継者に納められたと思われるが（23）、元禄六年から死の宝永元年迄の間に、何らかの理由で初代が祐天に帰依するようになったか、或いは、遺族（妻、栄や二代目団十郎）が信仰をもっていたからか等は、未解決の問題である。

さて、ここでは、初代の願文に祐天と並べて書かれている「奥沢」の上人、これは誰であろうか。これは、九品仏浄真寺の開山、珂磧上人ではないかと思われる。

上人は、元和四（一六一八）年—元禄八（二六九五）年の人で、延宝六（一六七八）年、六十一歳の時、世田谷の奥沢に移った。堂を建立し、自身が深川靈巖寺に造立した九品の像を移した（国史大辞典）。

『珂磧上人行業記』（『浄土宗全書』十七卷）をみると、珂磧上人は、靈にとり憑かれた人を救済したり、念仏により病者をなおしていた。そのため、帰依者は日を追って増え、有名だった。共に隠遁者であり、靈を成仏させ、病人を癒した点は祐天とよく似ており、対にされるにふさわしい人物と思われる。

『江戸名所図会』には、九品寺寺宝に「亡者の文」「接待大茶釜」

があり、それぞれ、上人が、依頼者の先妻の死霊、継母の死霊を成仏させた由縁の品だといひ伝えている記述がある。祐天の事蹟と似ているといえる。

もちろん、団十郎願文の書かれた元禄六年は珂磧上人晩年であり、奥沢にいた時期である。

こうしてみてみると初代団十郎は、父祖の地の信仰を伝え、また、江戸で当時盛んだった信仰にも目を配りつつ、自分の属する浄土宗の念仏の教えも守り（願文中に述べられている）、また同時代の念仏の隠者達にも注意を払って尊敬の念を抱いていたようである。

そして彼が祈請した内容は、父母に孝養を尽くすために順死往生（24）を願う他は、専ら家族の安全、劇界での上首尾など現世利益を祈っている。そして、不首尾は自らの精進が足りなかった結果だとして、更にいろいろな精進につとめてゆくのである。

彼の願文は、非常に信仰深い初代の様子を伝えると共に、当時の民衆の信仰を窺い知るうえでも興味深い材料だといえよう。

この小論は、平成八年度仏教文学会春季大会に於いて「不動・祐天・團十郎―民衆宗教の一側面―」と題して口頭発表した内容のうち、一部を抜出して補足したものであることを付記いたします。

なお、末尾になりましたが、貴重な資料を閲覧させていただいた千葉県立図書館、早稲田大学演劇博物館等各機関に深く御礼申し上げます。

注

- (1) 「団十郎の出自と信仰」『歌舞伎』二十号、昭和四八年四月。
- (2) 「初代団十郎の願文―解題と翻刻―」（加賀佳子・武井ゼミナール『演劇研究』十七号）。
- (3) 武相叢書の一。石野瑛編著、昭和四八年一月、名著出版。
- (4) 前掲書に載せる「大山史」による。石野氏の解説によると、「大山史」（大山寺所蔵）は、「傳燈大阿闍梨有長の代、明治三十二・三年に書かれたもので、時の大山寺住職等によって編まれたものであろう」とのことである。
- (5) 『曾我兄弟物語』（立木望隆、城前寺曾我兄弟遺跡保存会、一九七九年）、「曾我兄弟と大山不動尊」（宇都宮泰長・鈴木隆長『大山不動尊と日向薬師』竹内洋出版、昭和五六年四月）、等に紹介される。
- (6) 「初代団十郎年譜（一）―誕生より元禄九年―」（加賀佳子『歌舞伎―研究と批評―』十四号、一九九四年二月）。
- (7) 『市川団十郎の代々』上（伊原青々園、大正六年、東京市川宗家）。
- (8) 「妙見信仰と虚空蔵信仰―日本の星神信仰覚書―」（『妙見信仰調査報告書』（一）、千葉市立郷土博物館、平成四年）。
- (9) 千葉氏以前から房総には星の信仰を伴う観音信仰が盛んだったとする意見もある。「千葉妙見をめぐる神仏」（宮原さつき『妙見辛信仰調査報告書』（三）、千葉市立郷土博物館、平成六年）。
- (10) 『千葉妙見大縁起絵巻』（栄福寺蔵『妙見信仰調査報告書』（一）所収）。注（8）参照。
- (11) 「星と虚空蔵信仰―日本星神信仰史覚書その一―」（佐野賢

- 二『虚空蔵信仰』民衆宗教史叢書、雄山閣出版。
- (12) 注(10)参照。『千葉妙見大縁起絵巻』(千葉市立郷土博物館、一九九六年)に載る解説には、享録元(一五二八)年成立とある。
- (13) 宮原さつき『千葉妙見』の本地をめぐる「『妙見信仰調査報告書』(二)、千葉市立郷土博物館、平成五年)。
- (14) 『仮名垣魯文の成田道中記』所収。鶴岡節雄校注、千秋社、昭和五五年。
- (15) 妙見寺(金剛授寺)は現在の千葉市内にあつて祭星の祠壇、千葉氏の氏神だった。現在の千葉神社。
- (16) 『四代目市川団十郎』(渡辺保、一九九四年、筑摩書房)に詳しい。
- (17) 『略縁起集成』第一巻、中野猛編、一九九五年、勉誠社。
- (18) 『法王山万満寺史』(昭和六二年、万満寺)。
- (19) 「東国特に鎌倉に於ける不動明王信仰資料について」(太田次男『成田山仏教研究所紀要』三号、一九七八年)参照。
- (20) 『新修成田山史』(神崎照恵、昭和四三年、大本堂建立記念開帳奉修事務局)。
- (21) 加賀氏は、成田山と団十郎の結びつきがはっきり示されるのはこの時が最初だとされる。注(6)参照。
- (22) 文化五年版本。
- (23) 「祐天寺と団十郎―初代く五代目の信仰問題―」(『歌舞伎―研究と批評―』十五号、一九九五年六月)。
- (24) 団十郎は「順死往生」の意を誤解している。「尤わかうして父母に先達者もあることなれど、まづおもひねがはしきはじゅんしだ(順死)往生の道」とあるところからみると、

年齢順に没することだと理解しているようだ。しかし、「順死往生」とは、「現在に於いて念佛等の業により次生に往生の果を受く」(『浄土宗義概説』阿川貫達、浄土宗、昭和三年)ということであり、それに対する「順死往生」(第一生に業を造り第三生以後に往生の果を受くるもの)という言葉もある。

## 歌舞伎

研究と批評 19

一九九七年六月二〇日 第一刷発行